3.11あの日から２年

写真家たちによる東日本大震災復興支援活動

～写真家である前に一人の人間として～

2011年３月11日の東日本大震災以降、写真家や写真関連団体、企業はそれぞれの立場で復興支援活動をしてきた。日本写真家協会としても震災直後の2011年４月にチャリティー写真展を開催し、2012年には「生きる」展をドイツ・ケルン市で行われたフォトキナや、東京、仙台で開催した。また多くの会員が被災地を訪れて様々な活動を積極的に行った。写真を通して事実を伝え、見る人の内面に訴えかけて行動を促していくことは写真家の重要な役割だが、ここでは写真家や写真に深く携わる人が、現場に根ざして直接また間接的に被災地の復興支援を継続して行っている事例を紹介したい。

フォトボランティアジャパン基金によるチャリティー写真展

日本写真家協会の会員有志が集まって1989年に発足したハチク会が中心となり、チャリティー写真展を長年にわたって開催してきた。2012年までに16回のチャリティー写真展を行い、作品即売による収益金は「フォトボランティアジャパン基金（http://www.photovolunteer.org/）」にプールして、湾岸戦争難民救済金、奥尻島地震災害救済金、阪神大震災救済金、カンボジアのプレイベン州の学校へ校舎を寄付するなど、世界の恵まれない子どもたちの教育や医療のために使われ、国際的な社会貢献活動をしてきた。震災以降のチャリティー写真展収益は、福島の子どもたちへの支援活動に使われている。2011年は「JIM-NET」へ寄贈され、福島に暮らす子どもたちの短期間疎開費用などに充てられている。2012年の写真展には145名の写真家が参加し、147点の作品が販売された。収益は「いのち・むすび ば～放射能からいのちを守る山梨ネットワーク～」へ寄贈され、福島から山梨に避難する人びとや保養に来る人びとの支援活動費に使われている。リーダーの熊谷正さんは、「大きな団体に寄付すると使用用途がわからなくなってしまうことが多い。小さいけれども草の根的に活動する団体に寄付していくことで、二人三脚的な関係ができ、地に足のついた活動、支援ができる」と言う。フォトボランティアジャパンの運営メンバーは現在10名。今後も多くの写真家に声をかけながら被災地を対象としたチャリティー写真展を続けていく。メンバーからは、将来的には自らNPOを立ち上げて、寄付だけにとどまらずによりダイレクトな活動をしていきたいという声も上がっているという。

2012年チャリティー写真展会場（富士フイルムフォトサロン）

「いのち・むすび」代表に支援金を寄贈

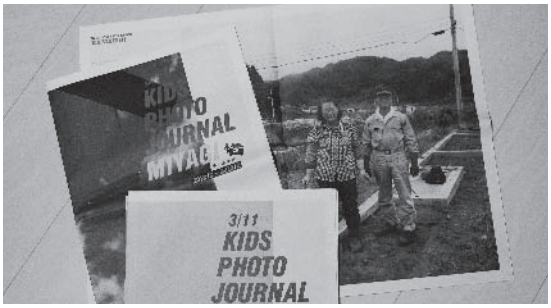
後藤由美さんの「3/11キッズフォトジャーナル」

アジアを中心にフォトコンサルタントとして活躍しながら、東京東向島で写真ギャラリー「Reminders Photography Stronghold（http://reminders-project.org/）」を運営し、国内外の写真家の育成、支援など国際的な活動をしている後藤由美さん。被災した子どもたちが写真と文章を使って311のその後を世界に向けて定期的に発信するプロジェクト「３/11 Kids Photo Journal（http://kidsphotojournal.org/）」を2011年に立ち上げた。2004 年

のスマトラ沖大地震・インド洋大津波の被災地であるアチェの子どもたちが写真と文章で世界に伝えたいことを記録した「InSight Out!」プロジェクトを行った経験が活きているという。写真家のサポートのもと、岩手、宮城、福島の約30名の小中高生自身がふるさとの復興していく姿を取材、撮影し、言葉を綴った新聞「KIDS PHOTO JOURNAL」を発行、ギャラリーでも展示を行っている。CIPAフォトエイド基金（※注）を受けつつ、同紙の売り上げはすべて子どもたちの活動継続のために充てられる。

後藤由美さん（キッズフォトジャーナル展示会場にて）　（撮影・山縣 勉）

自ら課題を選定し、「伝える」ことを意識して撮られた写真は、子どもの目線とは言い切れない。他のメディアと異なり、内側から記録し伝える形は、見る者の心に強く訴えると同時に、被災地が復興していく姿を捉えた貴重な記録となっている。後藤さんは「活動は３年目に入り、子どもたちも活動の継続を望んでいます。今後は、写真家であり記者である子ども自身がこのプロジェクトのリーダーとなって活躍していってくれることを望んでいます」と展望を語ってくれた。



3/11キッズフォトジャーナル　（撮影・山縣 勉）

ブルース・オズボーンさんの「ITIE☆会いたい」プロジェクト

写真家のブルース・オズボーンさん（JPS会員）（http://www.bruceosborn.com/）は「親と子の関係を見つめ、家族、地域、社会、自然を含むすべての環境に敬意をはらい、平和を願う」という想いを込めて７月の第４日曜日を「親子の日」と提唱し、各地で親子の写真展を開催してきた。震災以降、そうした活動を基盤として被災地を訪問し、親子撮影を実施するとともに、CIPAフォトエイド基金を受けて東日本被災地応援プロジェクト「ITIE☆会いたい」プロジェクト（http://i-tie.jp/）を立ち上げた。被災で失われたさまざまな絆を写真の力で取り戻していくことを目的としている。JPS会員の熊谷正さんと写真家の高橋まゆみさんたちの協力を得ながら、これまでに６ヵ所の被災地でワークショップを開き、小中高生などを対象に撮影技術や写真の役割、またインターネットを使った情報共有化まで教えている。そこで学んだことを活かし、自分たちが暮らす町並みが復興していく姿や家族、友だちの様子を撮影する。集まった写真は数万枚に及ぶという。写真にキャプションを添えることで作品化し、「被災地の子どもたちによる写真展」を各地で開催している。Facebook上にも同じ作品を展示する「ITIE写真展オンライン会場（https://www.facebook.com/itie.project#!/itie.project）」を開設しており、被災地に暮らす子どもたちが、何を見て、何を感じて、何を思っているのかを知ることができる。またワークショップは被災地だけにとどまらず、こうしたSNSを活用することによって、被災地と各地に暮らす人びとの双方向コミュニケーションが図られ、場所を越えた絆が生まれているという。

「被災地の子どもたちによる写真展」会場

ワークショップ参加高校生との集合写真

※注：「CIPAフォトエイド基金」とは、一般社団法人カメラ映像機器工業会（CIPA）と公益財団法人日本財団（日本財団）が、日本大震災で被災された地域の復興を支援するために、写真・映像を通じて支援活動を行う市民団体の助成を目的とした基金。2011年７月から始まり2013年３月で終了した。

広河隆一さんの「NPO法人　沖縄・球美（くみ）の里」

フォトジャーナリストとして「DAYS JAPAN（http://www.daysjapan.net/）」を編集、発行する広河隆一さん（JPS会員）は震災直後、DAYS JAPANを通じた募金活動によって被災地に食品放射能測定器やホールボディカウンター等数千万円分を寄贈、また「DAYS被災児童支援募金」を立ち上げ、原発事故で被災した子どもたちの健康回復を目的とした保養プロジェクト「沖縄・球美の里(http://kuminosato.net/)」を開設した。これはチェルノブイリ原発事故後にベラルーシで子どもの保養施設「希望」を建設し、20年にわたり６万人の保養支援を続けてきた自身の経験に基づいている。沖縄の久米島で海を見下ろす高台にある元陶芸工房を購入し改修して、2012年７月にオープン。以降毎月約50人の福島の子どもと保護者を受け入れ、2013年５月時点で約500人がこの施設で保養した。約２週間の子どもたちの参加費は交通費も含めてすべて無料。汚染されていない、自然の美しい島でのびのびと遊び、土地のものを食べ、沖縄の文化や島の人びとと触れ合う。この保養によって被災のストレスから解放され、免疫力をつけてもらうことを目的としている。シンボルマークのデザインは宮崎駿さん。毎月約400万円の保養・運営費用はすべて募金（これまでの総額は１億円を超える）による。球美の里ではメーカーの援助も得て写真クラブを開催。常時募金やボランティアを募集している。このほか子どもの甲状腺検診のプロジェクト、汚染地の測定と発表も行っている。

沖縄・球美の里

美しい沖縄の海で保養する子どもたち

女川町　佐々木写真館三代目　鈴木麻弓さん

鈴木麻弓さん（http://www.monchicamera.com）は宮城県女川町出身の写真家。父親が経営する女川の写真館は津波にのみ込まれ、両親を亡くした。自らを鼓舞しつつ、居住する神奈川から生まれ育った地元に通って、現地に根ざした活動を続けている。震災直後、母校でもあり父が撮影に行く予定だった小中学校の入学式の撮影をきっかけに故郷での撮影を開始した。以来、父から引き継いだ卒業アルバムなどの仕事を継続するとともに、様々なボランティア活動を行っている。写真家とヘアメークなどがチームとなって「毎日が楽しくなる笑顔レッスン」という年配女性を対象とした企画で仮設住宅集会所を回った。即席スタジオで女性たちの笑顔のポートレートを撮り、被災地に潤いをもたらす。「女性が元気になれば町も明るくなる」と鈴木さんは言う。女性たちには父を知る人も多く、とても喜ばれたという。「女川マダム」と題した写真展も開催している。また、女川ファンを増やしていく活動の一つとして「お

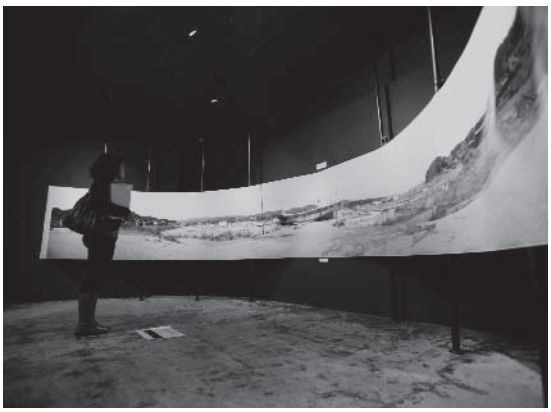
鈴木麻弓さん

「女川マダム」の撮影風景

ながわ散歩（http://onasanpo.exblog.jp/）」というサイトで、復興する女川の様子や地元の飲食店などを紹介している。今後、商工会青年部と共に映画を作る計画もあるという。こうした活動を通じて女川の今を広く伝え、是非遊びに来てもらいたいという。仕事やボランティアのために、神奈川から女川に通い続ける。「女川に通うのは、戻りたい、実家に帰りたいという気持ちが強いから。でももう実家はない。だからこうした活動を通じてずっと女川と繋がっていたい」。2012年には震災からの女川の日々を写真と文章で綴った写文集『女川佐々木写真館』（一葉社刊）が発行された。その中の一節が心に響く。「私はもともとプラス思考の人間ではない。だが毎晩泣いて、負の言葉ばかりを発する人に対し、仲間は寄ってくるだろうか、幸せはやってくるだろうか」

日本写真芸術専門学校の学生たちの支援活動「FLP=Future Lights Project」

日本写真芸術専門学校（http://www.npi.ac.jp/）の「Future Lights Project（http://www.npi.ac.jp/flp/）」は、写真家を目指す学生が、自らの専門分野である写真を駆使して社会（個人、企業、自治体など）と密接に関わり合いながら、写真だからこそできる社会貢献活動によって社会をより良いものにしていくことを目的としたサークルで、学生自ら企画立案、実施を行っている。このFLPの活動のメインが宮城県気仙沼市を中心とした震災復興支援プロジェクトだ。CIPAフォトエイド基金の助成を受け、17名のメンバーが被災地に通う。被災や復興の風景記録、被災した人びとへのインタビューとポートレート撮影を行い、アーカイブ化している。取材先は気仙沼市長をはじめ、仮設住宅の居住者、取材先の道端で出会った人など多岐にわたる。インタビューを受けた人びとも、将来への教訓として被災や復興の姿を若い世代の力で伝えていってもらうことに大きな意味を見出してくれているという。これまでに学園祭やギャラリーで3回の展示を行ってきた。高画素数の中判デジタルカメラを使った360度パノラマランドスケープは、被災地の重要な記録であるとともに、見る人の中で薄らぎつつある記憶を強く引き止める作用を与えた。また、取材で得た貴重な証言はインタビュー冊子にまとめ、無料配布している。気仙沼の被災者の方が作ったポーチやペンケースなども会場で販売し、売上げは展示会場で集めた募金とともに全額被災地に送っている。FLPは「自分たちは被災地と東京を繋ぐ役割」と捉え、今後も気仙沼や南相馬を中心に復興の記録を続けていくという。



被災地のパノラマランドスケープ展示

取材現場での集合写真

今回の取材を通して強く感じたのは、写真家である以前に一人の人間として、また自分のこととして震災や被災地を捉え、そこに継続的に関わっていこうという固い意志だった。いや意志というよりは本能と言うべきものかもしれない。震災から2年以上を経た今、被災地を訪れる写真家が徐々に減ってきたという現場の声を聞く。確かに瓦礫の撤去が進み、目に見える震災の爪痕というものは少なくなってきている。しかし、傷ついた人の心や放射能汚染によるストレスは瓦礫の撤去と同じように物理的に復旧できるものではない。写真家としても、震災や復興の記録という点で次の段階に入っていると言えるだろう。また、今回紹介した事例に共通しているのが、支援継続のための資金面での課題だ。CIPAフォトエイド基金も2013年3月で終了し、個人や団体で行う活動のほとんどは募金やボランティアで運営されている。周囲に賛同を呼びかけ、共感を得るための働きかけも活動の大きな柱となっている。熱意あるところには人が集まると言われるが、こうした活動を支えていこうという意識を我々も持ち続けていかなければならない。（取材・文責／山縣 勉）

※掲載の写真は「後藤由美さん」を除き、各取材先の提供によるものです。